

キイチゴ類、ウグイスカグラ、サクラ類、クワ類、ナツグミ…新緑の森で果実の実りが始まります。果実を好んで食べる野生動物にとっては待ち臨んだ季節の到来でしょうか。一方、カタクリやネコノメソウ、ニリンソウなどの春植物が一段落した森の林床は、キンラン、ギンランなど初夏の山野草に移り変わっています。この時季の移ろいは早く、もう少しすると梅雨の足音が聞こえてくる頃です。

今回は、梅雨の時期に咲く「マルバノイチヤクソウ」を紹介します。山地帯の林内に生えるツツジ科の多年草で、2年前に初めて市内で確認することができました。同じ仲間のイチヤクソウは、丘陵地から山地にかけて生えるので見たことがある方も多いと思いますが、マルバノイチヤクソウは中々見ることはできません。東京都レッドリストでは西多摩地域において絶滅危惧種Ⅱ類に指定されており、全国でも園芸目的の採取や森林伐採等の影響で数を減らしている所もあるようです。特徴は、イチヤクソウに比べて横に広い楕円形の葉、赤みのある花茎、薄っすら赤みを帯びた白花で、イチヤクソウの花言葉「恥じらい」に一番相応しい種なのではと感じています。

樹々が葉を茂らせた林床で下向きの可憐な花を咲かせるイチヤクソウの仲間は、梅雨の森に似合う美しさがあります。一方、光が十分に届かない林床で生きていくのは大変だろうと思いがちですが、心配無用の驚きの生き方をしているのです。イチヤクソウの仲間は多くの植物と同様、光合成をして必要な養分を作り出しています。そして、自身の根に共生している菌類と互いが得た養分の交換をして不足する分を補っています。これだけでも驚きですが、イチヤクソウの仲間は更に、周囲の樹木と共生関係にある別の菌類を介して樹木が作り出した養分を得ているのです。生い茂った草花に葉が埋もれて光合成ができなくても、生きるための巧みな戦略を持っているのです。

マルバノイチヤクソウとの出会いで「補い合う多くの生物が複雑な環境を作り出している。そこに生きる種を守るためには環境を守ること重要だ」と再認識できました。今年も無事に花を咲かせているのか確認しようと思っています。

(加瀬澤)

